

子規言行録序

何か一藝に秀いてた人は、その藝の爲めに全體の人格を掩はれて仕舞つて、只だ藝だけを以て世に持て囃さるゝことが多い、例を擧ぐれば、細井廣澤といふ昔の書家であるが、この廣澤は立派な儒者であつて又た立派な政事顧問であつたのみならず、廣澤は最も武藝に長じ又た兵學に通じたのであつた、であるが、廣澤の始めて文徵明の書風を江戸の眞中に弘めて、元祿時代の日本を其の筆跡にて風靡した處から、今も多くの人は廣澤を徵明流の書風の元祖として又た近古第一流の書家として記憶する、それで廣澤の他の長所寧ろ廣澤の人格の全體を知る者は少ない、廣澤は随分長命した人であるが、何にせよ當時封建の盛んな際で、只た一藩の抱へ儒者たるに止まつて、シカモ太平の世であるから、其の技能抱負を施すことが出来ずに一世を終つたのである、廣澤と彼此同時であるが、松尾芭蕉寶井其角なんどいふ俳人たちも、其の言行の超凡にして一世の欽仰を受けたことから考へると、全體の人格は餘ほど優れて居つたものとせねばならぬ、俳人としてのみ持囃さるゝのは、この偉人共の爲めに惜むべしである、兎角世間はその人の學問や技藝のみを見て人格の全體を問はぬ風がある、芭蕉は俳人の宗とする所であるが、俳句に於ては芭蕉よりも巧なる人は幾人もあつたらう、歌人にした處で加茂眞淵の門人で眞淵よりも上手な歌よみは少からぬやうであるが、人々が欽仰して師の翁のと崇めたのはその人格の超凡であつた證據といはねばならぬ。

明治十六年の夏のころと記憶して居るが、友人加藤拓川(今の白耳義國在勤全權公使恒忠氏)が佛蘭西へ往かうといふので、語學練習の爲めに築地の天主教會堂に寄宿して居た、或日子の寓居に来て色々話した中に「此のごろ國元から甥のヤツが突然やつて來たが、まだホンの小僧で何の目當も無く、何にしに來たのかと聞いたたら、學問しに來たと云ふてる、僕も近々往くのだし世話も監督も出來るぢや無し、いづれ同郷の人に頼んで往くのぢやが、君の處へも往けと

云つて置いたが、來たらよろしく逢つてくれ玉へ、との話もあつた、二三日たつとやつて來たのは十五六の少年が、浴衣一枚に木綿の兵兒帶、いかにも田舎から出だての書生ツユであつたが、何處かに無頓着な様子があつて、加藤の叔父が往けと云ひますから來ましたと云つて外に何も言はぬ、ハア加藤君から話がありました、是から折々遊びにれ出なさい、私の宅にも丁度アナタ位の書生が居ますかられ引合せしませうと云つて予の甥を引合はした、やがて段々話する様子を見ると、言葉のはしどぐに餘程大人じみた所がある、對手になつて居る者は同じ位の年齢でも、傍から見ると丸で比較にならぬ、叔父の加藤といふ男も予よりは二つもわかい男だが、學校に居る頃から才學共に優ぐれて予よりは大人であつた、流石に加藤の甥だと此の時はや感心した、その後當分見えなかつたが、二年もたつた頃尋ねて來た、其の時早や大學豫備門に這入つて居るとのことであつた、予は驚いた、田舎から出て來て二年も經たぬ内に豫備門に入るなどは餘程珍らしい方である、その後久しく見えなかつたが、予の『日本』を始めたころ留守中に名刺があつたことがある、其のところ高橋自侍庵(健三)は官用にて佛蘭西へ往く事になつたから予は加藤に宛て、紹介状をやつた、二人は彼の地で一見舊の如くであつたそうだが、やがて高橋が歸朝して、加藤から托せられた獨逸文のエステチックの書物を其の甥に届けねばならぬと云つた、多分本人が注文したのであらう、加藤の甥と云へばアの少年だが、なるほど今ごろは大學に居る筈だ、併しモ一こんな書物を讀むやうになつたかと驚いて話したことがあつた、その後文科大學に居るといふことを聞いたが、二十四年の秋予が根岸の寓を尋て來て來年は卒業の筈だが、病氣の爲めに廢學する積りだと語る、ドンな病氣か知らんが我慢して卒業したらどうかと勸めても、決心はあかく動かせない、近ごろ俳句の研究にかゝつて少しく面白味が付いて來たから、大學をやめて専ら之をやらふと思ふと言ひ、根岸に座敷を貸す家があらば世話してくれと云つて歸つた、その晩端書に「秋さびて神さびて上野あれにけり」といふ一句をかいたのが來た、この時予は俳句の趣味などを

少しも解せぬ、こんなものを研究してどうする積りか、病氣保養の爲めとあらば格別だが、これで文學に貢獻せんなどといふのは、アの男の了簡違であるまいかと、一人で心配して居つた、ちよろど寓居の向ひに老婦獨住ひの家があつて誰か確かな人に下宿させたいとのことであつたから早速そのことを報じてやつたら、すぐやつて来てやがて引越して来た、是れから隣同志となつて、毎日往來する間に俳句の味が少し分りかけて来た、其のところ新聞紙上に十七字の句を出す者は其角堂永機の輩か左もなくば角田竹冷の徒で、それも至つて少い方であつた、どうだ何か『日本』へ出して見たらばと云つたら、かねて書いてある紀行でも出さうとのことで、それからそれと俳句まじりの紀行などは出た、これが抑も正岡子規の初陣である、其後の事は子規の名聲と共に大概世に知れて居る、愈々この世を去つて後は都鄙の諸新聞争つて逸事遺聞を記し、又其の人格を各方面より觀察して書いてある、今度それ等の切抜を集めて一冊にまとめ、其れを同好に頒たんといふのである、追つて子規門下の人々等は其の詳傳を編まん時には最好の材料ともなるであらう、子規に親炙した人々は皆なその人格の超凡を知つて居るが、世間一般ではよく知らぬ、甚しいのは只だ新派俳句の宗匠とのみ思つて居るやうだ、矢張り一藝を以て全體を掩はれた仲間である、子規が文壇に出陣してから僅に十年にて世を去つたのだが、十年間のその七年は病床の上で暮した、それて世を風靡した勢力といふものは學問藝術の力ではなく、全く其の人格の超凡を證據である、僅かに十年の間でシカモ病床の上で俳句や歌で以てアレほどの名聲を成したのだ、若し健康であつて尙ほ世間並に二十年も長命したならば、まだく仕事をしたであらう、文學ばかりではなく、政事界にも飛出して仕事をしたであらう、思慮といひ氣魄といひ何處にでも當てはまる人格であつた、詳しいことは『子規隨筆』と併せて本書を見ればれのづから分かるであらう。

子規居士四十九日逮夜